格外教育論

――役立たずの教育のすすめ

庄司和晃

一　格外教育とは何か

格外教育とは、人間ばなれ・常識ばなれ・組織ばなれ・国家ばなれ・思考ばなれ・意味ばなれ・学問ばなれ、のありようを示す教育である。

つまりは、人間的所業をはなれた世界の教育である。

その人間的所業の価値を「無」とする教育である。

ないしは、人間的な約束ごとをご破算にした生き方の教育である。

それにまた、そこへ着地せんとする教育である。

一言でいうと、人間レベルを超えた、宇宙レベルの教育である。大自然レベルのそれと言ってもよい。

二　対する通常教育とは何か

それに比して、人間レベル・常識レベルにあるのが、通常教育である。
通常教育とは、ただじゃいやだ・やったらやっただけ相応の報いがほしい・ごりやくのないものなんか誰がやるもんか・名利（評価・勝ち負け・賞罰・善し悪し）で生きるのがあたりまえだ、そういう生き方を是認し、のっかり、おし進めるたぐいの教育である。
いわば、人間性を是とする教育である。

三

格外教育はあぶない

そういう人間性を否認し、人間尊重のラインをのり越え、役立たずの教育をやろうというのであるから、この教育は怖い存在となる。
ふつうの人々からは、当然目くじらを立てられ、気味いされ、危険視される。
おそれが、たぶんにある。その前に、否定と無視に出会うかも知れぬ。
全面教育学の大体を踏まえないとわからない世界である。
平生の教育的価値観を壊す行き方だからである。

四

格外教育の浮き彫り

ところで、格外教育の特徴は、なぜんに存するのか。

そこの点を、通常教育との対比の上で、浮き彫りにしてみることにしたい。表にして掲げてみよう。

格外教育の位置は、通常教育の基礎や土台をなすものであるから、左の表に見るように、下段にしてある。通常教育は、この基礎の上で活躍する積々の教育ということになる。あたかもそれは、釈迦（宇宙・基礎）の掌の上で縦横にあばれる孫悟空に比することもできようか。

(1) 浮き彫りの第一

通常教育	格外教育
(1) 胸算用で動く	① 只管に動く
(2) 自我に生きる	② 我をこえて生きる
(3) 階段のぼりの前進	③ ただちにそこへ行く
(4) 積み上げ的行為	④ いつも初心
(5) 技術がいる	⑤ 技術はいらない
(6) くろうと尊重	⑥ しろうと尊重
(7) 他とかけあいあり	⑦ 他とかけあいなし
(8) 効果を期待する	⑧ 功徳なし

二十の彫り浮き彫り (2)

通常教室（人間レベル 自然感覚彫り）

(1) うまくやっていけ
- 上手に生きよ
- 要領よくやれ

(2) 集中してやれ
- 執着せよ
- 集中に法箴（得）がある

(3) 判断力をみがけ
- 左右を決めろ
- 損得・理者を考えよ

(4) なせばなる
- 結果的にやれ
- 意識を使え

(5) ココを正念場
- 心を入れよ
- 賭けに生きろ

(6) 比較の中で生きる
- 選別したがる
- エリートがすき

(7) やっただけのことはある
- なんかのためにする
- 目的目標で行動

(8) 人間をねぶみする
- よしあしでみる
- 差・ねだんをつけたがる

格外教室（宇宙レベル 感覚的彫り）

① うまくやらんでいい
- いろいろある
- 流れにまかせろ

② 集中するな
- 執着するな
- 追いかけるな

③ はからいはいらぬ
- 自然でいい
- 計算はいらぬ

④ なるようになる
- なんとかなる
- まったりまったにしていろ

⑤ どこもみな正念場
- どれもよし
- みんないただく

⑥ 比べっこなし
- あれはあれ
- すべてそれぞれ

⑦ やっただけのことはなし
- 縁によってただやるだけ
- 期待なし

⑧ ねぶみなし
- それはそれ
- ただつきあう

(3) 浮き彫りの第三

通常教育（人間的）	格外教育（自然的）
(1) 作為よし ・いろいろと考えよ ・計画・計算で動け	① 無作為 ・おのずから ・湧出したがって
(2) 個性的であれ ・自分をもって ・自力を発揮せよ	② 個性はいらぬ ・ことさらめくことはするな ・感動第一
(3) 特殊を喜ぶ ・他とちがうことを誇る ・特殊業を希う	③ 平凡でいい ・平凡でよい ・ありあいなし退屈でいい
(4) いつも何か情しい ・いくらでもほしがる ・なんか探しまわっている	④ あるがままに受領 ・知足ですぞ ・今ここに満足
(5) 理想で追め ・希望がだいじ ・アンビシャスこそ	⑤ そんな想像するな ・どっち上げはせあろ ・身がわに公式なし
(6) 人格者がいい ・それをめざせ ・人からと上のあよ	⑥ 人格者なんて関係なし ・ありのままでいい ・人格になる低なし
(7) 評価しろ ・いつも翻意したがる ・規準でも設定したがる	⑦ 評価をはずせ ・そのままに見よ ・みんな認める
(8) 群を抜いて益あり ・自己満足の道楽 ・他を抜くことに価値をおく	⑧ 群を抜いて益なし ・自然にまかせる ・信の力の発揮

(4) 浮き彫りの第四

通常教育	格外教育
(1) 自我	① 無我
(2) 世法	② 仏法
(3) 進歩	③ 退歩
(4) 曼荼羅	④ 秘密
(5) 自力	⑤ 他力
(6) 諸法	⑥ 実相
(7) あらわれ	⑦ 本源
(8) 是	⑧ 如

(5) 浮き彫りの第五

通常教育	格外教育
(1) 有限者	① 無限者
(2) 卷有 ○色有	② 仏性 ○空・無
(3) 功徳	③ 無功徳
(4) 森羅万象	④ 天地のいのち
(5) 在家 ○主義・宗教	⑤ 出家 ○さとから出る
(6) 現成	⑥ 公案
(7) 個物多	⑦ 全体的一
(8) 相対判	⑧ 絶対開

この五つのうち、(1)の「浮き彫りの第一」のみは、拙著の『全面教育学入門』（一九九四年十一月・明治図書）の冒頭に掲載してある。以下、それに続けて、さらに整えてみたも

のである。この新たなる「浮き彫り」の第二五の趣意は、第一のそれの、いわば強化、裏づけ・二面の具体化のためである。

五　格外的生き方へのタッチ

格外教育の特徴を、右のごとく、項目的に見てきた。

そこで、さらなる具体化を念頭に置きつつ、人生観等の表明にみる「格外的生き方」にタッチしておくことにしよう。

(1) 小林秀雄――「行き当たりばったり」

「自分の書くものはどれも、いつも、はじめになんかあるんです。どっかからやってきたのでしょう、一つの感動とか、ある直覚とかが、先にあって、それを表現しようとしたんです。自分を出そうとしたんじゃない。ぼくは計画の立たない男で、とにかくその場その場で解決していったつみかさなりが、そうなったのでしょう。どうも、そういう、行き当たりばったりというものが人生というもんじゃないですかな。」（『新潮』カセット文庫『小林秀雄講演』。本居宣長」一九八六年一月二四日、新潮社。その質疑応答の中より）

(2) 森毅――「いい加減でいいじゃないか」

(3) 姜尤孟司――「はみ出し者」（森毅・姜尤孟司著『奇ツ道』として考える』PHP研究所）

(4) 遠藤周作――「ぐうたら」（『ぐうたら生活入門』『ぐうたら人間学』講談社文庫）

(5) ジョージ秋山――「はぐれ雲」（『浮浪雲』1　一九七五年七月一日、小学館）

(6) 宮沢賢治 ― 「デクノボー」

「…アコユルコトヲ ジブンヲカンヂャウニ入レズニ…」「…ミンナニ デクノボートヨバレ ホメラレモセズ クニモサレズ…」 (天沢退二郎編『新編宮沢賢治詩集』一九九一年七月三十日、新潮文庫、302―303頁。その「『雨ニモマケズ』について」より)

(7) 良寛 ― 「死ぬ時節には死ぬがよく候」

「地しんは信に大変に候。…しかし、災難に逢時節には、災難に逢がよく候。死ぬ時節には、死ぬがよく候。是はこれ災難をのがるゝ妙法にて候。…」 (東郷豊治編著『良寛全集』下巻、一九五九年十二月二十五日、東京創元社、308頁)

【注。これまでの拙著でとりあげた人たち】

壷井繁治 ― 「ただの人間になってもらいたい」 (『柳田民俗学の子ども観』90頁にて)

植垣一彦 ― 「一時間を煙突で追悼コンサート」 (『コトヴァ教育と教育の知恵』120頁にて)

無着成恭 ― 「人生に雑務なし」 (『科学ぼっかり主義の克服』3―4頁、『全面教育学入門』106―110頁にて)

沢木興道 ― 「禅禅の中から人生を考えてみたらようかりそうなもんじゃ」 (『科学ぼっかり主義の克服』48頁にて)

そういったところである。

たとい、自身が、がく、なれなかったとしても、そこを、まともにたらんでおく必要がある。

なにしろ、通常教育を手玉にとりうる、何よりの眼力をもたらしてくれるからだ。

(一九九七・一・十二)